

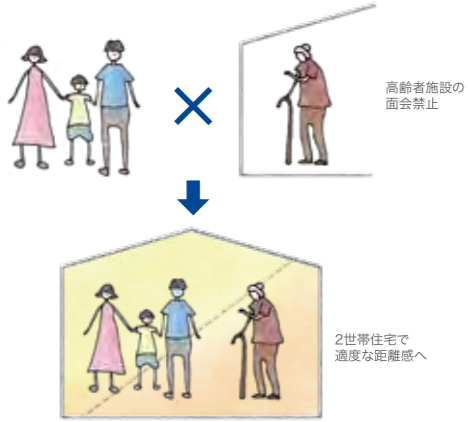


# 優秀賞

北海学園大学  
三浦 光雅・渡邊 憲成・高崎 菜々美

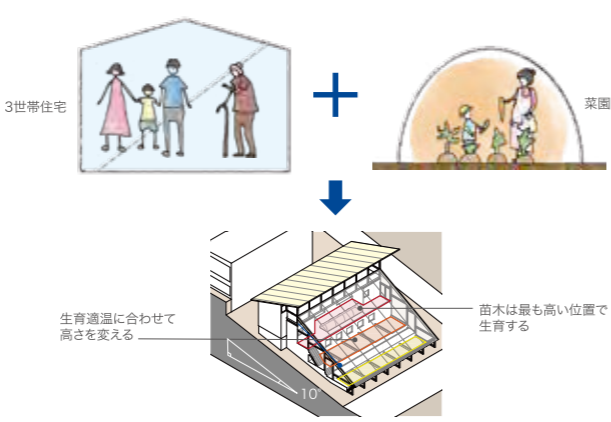
【作品名】  
野菜を育て、暮らしを育む

## 1. 計画 -つかず離れずの2世帯住宅-

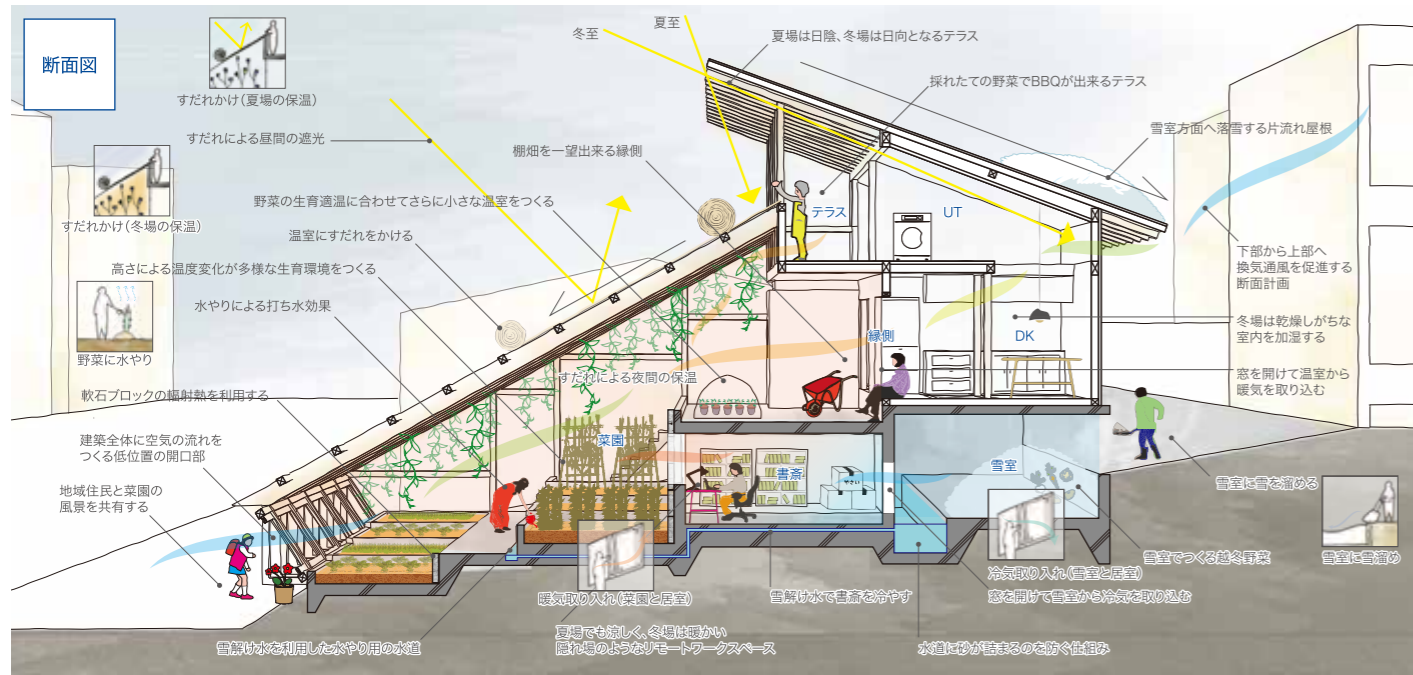


コロナ禍で高齢者施設の面会禁止など、家族と会う機会が失われている。一方で、リモートワークの普及により、働く場所が自由になりつつある。そこで、北海道札幌市郊外に親子が暮らすための2世帯住宅を計画する。コロナ禍の三密回避と同時に、多世帯住宅における世帯間の適度な距離感を設計する。

## 2. 提案 -環境装置としての家庭菜園-



住宅に菜園をつくり、野菜づくりで発生する温度を室内に取り入れる。菜園内は棚畑とし、高さの変化で生じる温度差から野菜の種類や生育段階を分ける。3世帯がそれぞれ野菜づくりを教え、教わり、一緒に育てて、食べる。さらに地域住民にお裾分けするなど、さまざまなつながりが生まれる。

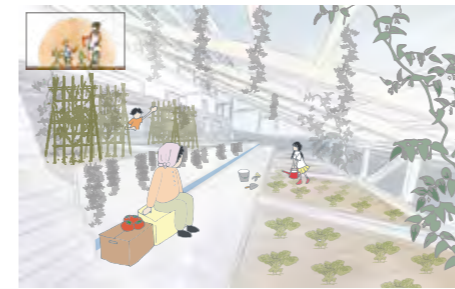


## 設計コンセプト

高い断熱性能や空調などによって決して不快ではない現在の暮らし。その一方で、何気なく窓を開けた時のふとした快適さが心地良いとも感じられる。住民の生活行為によって暮らしが育まれる住まいは、今後さらに技術が発展する未来においてより重要になる。そこで、住民の暮らしを自給的に支える家庭菜園に着目し、コロナだけでなく未曾有の事態に備えた住まいを提案する。菜園では、さまざまな野菜を育てるために、さまざまな環境が必要とされる。そのため、菜園は地形に合わせて棚畑とし、野菜全体に日射が当たり、種類に応じた温度差を生み出す。さらに、季節や時間に応じて屋根に簾をかける、水やりを行う、窓を開けるなど、住民の手が加わってより繊細な菜園環境を整えることができる。こうして菜園で育まれた環境は、必要に応じて住環境にも積極的に

## 審査委員講評

地域の特性を活かした温熱環境を取り込んだ、持続可能な住まいの提案です。夏と冬の過ごし方や、菜園の高さに応じた生育環境など温熱の分析から建築の形態へと展開させている点を評価したい。また、家庭菜園を通して近隣住民との関わりへも言及している点が素晴らしいが、菜園内部に人が滞留できるような居場所が設計できているとより可能性が広がる作品です。



親と子孫と一緒に、野菜づくりを楽しむ



吹き抜けのある居室から縁側を通して菜園へと一体的につながる



収穫した野菜を地域住民にお裾分けする

## 平面図

